

フルロード

満員御礼! ジャパントラックショー

別冊ベストカー
読者会社ビーシー 調読社

full load

ベストカーのトラックマガジン



特集 4年ぶりの開催で4年分のトラックの進歩を実感!

ジャパントラックショー

トラックメーカー／架装メーカー／部品・用品メーカーを詳細レポート

解説&試乗 日本市場に満を持して登場した

新型ボルボFHリジッドを試す!

5軸未満おことわり

世界の多軸特装车大集合

定価1320円

VOL.45

2022 Summer



エコロジーボックス

リトラス

中古トラック大手のリトラスは、架装部門製作の単車ノトレーラ製品を出品。その場で販売も行なった。大分の愛宕自動車工業と共同開発した「エコロジーボックス」は全長11204mmの日本トレクス製3軸コンテナ用トレーラに日本製鉄製耐摩耗鋼板「ABREX」採用の34ftコンテナを搭載。小回り性と頑丈さを兼ね備える点をアピールしていた



2015年から納入を開始した6台積み1軸セミトレーラの最新22年モデル。上段フロアにセンサーを設置して下段の積込み車両との距離を検出、接近時には自動停止する機能を搭載し、フロア操作ミスを防止している。また人が車両へ接近した際の自動音声警報システムも搭載している



Tモデル

浜名ワークス

車体メーカー・浜名ワークスは、大手自動車輸送企業2社向けの6台積み車両運搬セミトレーラをそれぞれ出品。トレーラのサイズ、積載台数は同じでも、ユーザーニーズに応じて車体構造・装備は全く別物であり、またニーズを満たすための技術開発の取り組みもうかがえるという、興味深い展示となった



新型ボルボFH

ヨシノ自動車

ボルボトラック正規ディーラーのヨシノ自動車はボルボ車などを出品。写真は新型ボルボFHセミトラクタのカスタム車両だ



車両重量が増す電動車の運搬を視野に、独自二相ステンレス鋼採用による主フレーム柱の薄肉化や各部の軽減孔設置などでトレーラ軽量化を実現。またスマホアプリからのフロア操作やフロア・積込車両間の隙間確認、車載カメラの車高映像確認など、最新技術を盛り込んでいる



Zモデル



三菱ふそうスーパーグレート

セノプロ

機能的でカッコいいトラックのプロデュースを行なうセノプロは多数のカスタムトラックを出品。写真は三菱ふそうスーパーグレート

軽トラ市

軽トラの荷台に、農産品などを並べて売る軽トラ市のブースでは、軽トラメーカー2社がそれぞれ2台ずつの軽商用車を展示している



昨年末に全面改良し、いまも冷蔵庫配送で活躍している「オートレディックパン」を出品。もう一台は、新開発CVTを搭載する「ハイゼットトラック」で、荷台に試作ウイングコンテナを積載、その内部に商品を陳列するコンセプトを披露した。近年はEV化ニーズも多いという



4月の一部改良で、ATが4速へアップされたスーパースターを販売車に見立てて展示。もう一台は駐車場を「コワーキングスペース」として活用する「オフィスカー」で、エブリイワゴンの後席と荷室に机、WiFi、リヤバンバーに外部電源入力コネクタを積載する

続々登場！ 輸入トレーラ

トレーラ需要が高まる日本では、国産のみならず海外メーカー車の輸入が拡大中だ。特にトレーラ輸送が普及している欧州からは、シャシー/ウワモノともに進んだ設計が多く、トレーラの多彩な可能性を覗くことができる。



ファシエック・トレーラーズ ツインデッキ



ケスボーラー ローベッド



ケスボーラー マルチファンクション コンテナシャシー

低床小径ダブルタイヤエアサス3軸の重機運搬セミトレーラ。第5輪荷重18t・軸荷重30t

伸縮フレーム機構を備えるシングルタイヤエアサス3軸のコンテナトレーラ。ISO20ft~45ftコンテナ兼用で、所有台数の最適化が図れる

EUトレーラーズ

このほどトランウェブが立ち上げた欧州製トレーラ販売事業ブランドで、現在の取り扱いメーカーはオランダのファンエック、ドイツのケスボーラー、イタリアのロルフォの3社。ブースには国内初上陸となるケスボーラーのダンプトレーラや重機運搬トレーラをはじめ計6台のトレーラを展示していた

油圧操舵機能付独立式エアサス・シングルタイヤ3軸により大容積バンボディを実現。庫内には上下2層式荷室を備え、上段55台・下段33台のかご台車(高さ1.71m)を積載可能だ

スス／灰を90〜100%除去！

リトラス・セラメックスの

DPFリビルト& リフレッシュサービスとは？

リトラスグループは中古トラックの買取／販売がメインで、北海道から沖縄まで日本全国にネットワークを展開。全国に9つの拠点を構え、特装車やトレーラも含め常に1000台の車両を在庫。このほか中古パーツの買取／販売、上モノ架装などの事業も行っている。

いっぽう、リトラス・セラメックスは2017年7月に同社とイギリスのセラメックス社が設立した合併会社。セラメックス社は欧米で25万件以上の実績を持つDPFリビルト／リフレッシュサービスのパイオニアで、独自の特許技術を用いた高品質なリビルト／リフレッシュサービスを行なっているのが特徴。日本の建機メーカーとも取引があるという。リトラスグループが自社で販売した中古トラックの販売後の故障原因を調査した



DPFは見た目が問題なくても実は詰まっている場合があるので要注意。この状態で強制燃焼をかけると内部で着火してフィルターが損傷し交換となる場合もある。ちなみに主な原因はオイル管理不足などという

ところ、DPFが原因となっていることが多いことが判明。また調査の過程で、トラックユーザーの多くがDPFのトラブルに悩みや不安を抱えていることもわかったという。対策を講じていたところ、日本進出を図るセラメックス社から合併会社の話が舞い込んできたことから、約1年の準備期間を経て合併会社を設立したという。

同社のDPFのリビルト／リフレッシュサービスは、福井県越前市のパーツセンター内の工場で行なわれる。リビルトは、受入点検、内部洗浄、乾燥、空気流速検査、光検査、赤外線検査、外部洗浄の大きく7つのステップ。リフレッシュサービスはこのうち内部洗浄、乾燥、各種検査のみを行なうものだ。ちなみに受入検査とは、入荷した中古DPFを点検し、管理バーコードを付ける作業のことである。

最大の特徴は、セラメックス社の特許技術を用いる内部洗浄工程で、従来の洗浄機が水道水と溶剤を用いるのに対し、同社は精製水と圧縮空気を使って洗浄。これによりスス／灰などの汚れを90〜100%除去する。

洗浄後の検査も特徴で、高精度の流速検査装置を用いてDPFに一定の空気を流し、流量や流速の測定を行なう空気流速検査のほか、種類／波長が異なる2種類の光を用いて検査を行なう光検査、赤



3月9日〜11日に東京ビッグサイトで開催された「IAAE2022(第19回 国際オートアフターマーケットEXPO2022)」の会場で、トラックのDPFを展示しているブースを発見。よく見ると、中古トラックの買取／販売で有名なリトラスグループの関連会社、リトラス・セラメックスという会社のブースだった。同社はリトラスグループとイギリスのセラメックス社の合併会社で、DPFのリビルト／リフレッシュサービスがメイン。トラック用のDPFといえば何かとトラブルが多いことで有名で、新品のDPFは最大100万円と高額なのがネックだが、同社では高品質なリビルト&リフレッシュサービスを低価格で提供しており注目を集めているという。今回は同社工場を訪ね、実際のDPFリビルト／リフレッシュサービス取材した。



内部洗浄工程は精製水と圧縮空気を使って行なうのが特徴。専用の機械にDPFをセットし、内部を精製水で満たしたところに圧縮空気を送ることでDPF内部のスス、灰、その他汚れを含めた目詰まりを解消する



(上)乾燥工程は高温の風を送る専用の機械でDPFを乾かすもの。いきなり高い温度の風をあてることで内部の水分が膨張してひび割れの原因となるため、徐々に温度を上げていく。(下)内部洗浄工程と乾燥工程を終えて綺麗になったDPFのイメージ

し同社は91%で約2倍の数値をマークしている。どちらも数値が大きいほど優れているということになる。

価格はリビルト品(洗浄済み在庫品)が新品の7割程度。DPF本体の新品価格は小型で約25万円、中型で約50万円、大型で約100万円ほどという。いっぽう、リフレッシュサービスの価格は10万円からで、DPFとインジェクターのリフレッシュをセットで行なうプランも用意。通常は予防整備としてリフレッシュ



(上)内部洗浄工程、乾燥工程を終えた最後の検査工程がスタート。写真は高精度の流速検査装置(DPF上に置かれているもの)を用いて流量や流速を検査している様子。(下)いっぽうこちらは光検査と赤外線検査の様子。洗浄、乾燥後に専用の機械を用いて行なう



検査の可否判定の結果をまとめたレポートは購入者も閲覧可能。DPFを故障に至らした原因を探る際のヒントとしても活用できそうだ

サービスを活用し、万一の故障時はリビルトが活用できるのがあるがたい。なお現在、同社はDPFのリビルト／リフレッシュサービスを年間1800〜2400台のペースで行なっており、今後の需要動向に合わせたさらなる拡張も検討中。また将来的には車載診断機の情報からDPFの詰まり具合を解析し、最適なタイミングで予防整備(リフレッシュサービス)を提案するサービスも展開する予定。今後の動向に注目だ。